

日本建築学会(和田章会長)は15、16の両日、東京都港区

東京の渡邊英徳准教授がを議論した。

「被災状況把握」を説明した。越村准教授は、数値シミュレーションとリモートセンシングの融合によって津波浸水域の把握、浸水域内建物の被害

判読、がれき域の抽出・土地利用状況の変化の把握などの状況を報告。この中で「浸水域内の家屋の再建は、雪国の家屋がヒントになる」との考

の建築会館で「第34回情報システム・利用・技術シンポジウムを開いた。今回は「情報技術の活用と都市再生」をシンポジウム全体のテーマに設定。開催を担当した情報システム技術委員会の加賀有津子阪大大学院教授は「委員会では、分野・プロセス横断的に情報システム技術を研究している。活発な議論を通じて建築・都市の分野における情報通信のあり方やさまざまな活用策を考えたい」とあいさつした。写真。

源栄教授は「緊急地震速報」について話題を提供し、「大揺れの前の安全確保が大事であり、報知系の対応とともに日常からの安全な場所と危険な場所の把握が防災対策のイ

ンセンティブになる。また、非日常の機能は日常機能との

る被災状況把握」を説明した。越村准教授は、数値シミュレーションとリモートセンシングの融合によって津波浸水域の把握、浸水域内建物の被害判読、がれき域の抽出・土地利用状況の変化の把握などの状況を報告。この中で「浸水域内の家屋の再建は、雪国の家屋がヒントになる」との考

る被災状況把握」を説明した。越村准教授は、数値シミュレーションとリモートセンシングの融合によって津波浸水域の把握、浸水域内建物の被害判読、がれき域の抽出・土地利用状況の変化の把握などの状況を報告。この中で「浸水域内の家屋の再建は、雪国の家屋がヒントになる」との考

会では、分野・プロセス横断的に情報システム技術を研究している。活発な議論を通じて建築・都市の分野における情報通信のあり方やさまざまな活用策を考えたい」とあいさつした。写真。

源栄教授は「緊急地震速報」について話題を提供し、「大揺れの前の安全確保が大事であり、報知系の対応とともに日常からの安全な場所と危険な場所の把握が防災対策のイ

ンセンティブになる。また、非日常の機能は日常機能との

る被災状況把握」を説明した。越村准教授は、数値シミュレーションとリモートセンシングの融合によって津波浸水域の把握、浸水域内建物の被害判読、がれき域の抽出・土地利用状況の変化の把握などの状況を報告。この中で「浸水域内の家屋の再建は、雪国の家屋がヒントになる」との考

る被災状況把握」を説明した。越村准教授は、数値シミュレーションとリモートセンシングの融合によって津波浸水域の把握、浸水域内建物の被害判読、がれき域の抽出・土地利用状況の変化の把握などの状況を報告。この中で「浸水域内の家屋の再建は、雪国の家屋がヒントになる」との考

建築学会シンポジウム

## 都市再生に情報技術活用

# 先進取り組み紹介

えを示した。

柴山助教は構築を進めている震災アーカイブプロジェクト「みちのく震録伝」の取り組みを説明した。みちのく震録伝は、東日本大震災で得られた記憶・記録・事例・知見・情報をすべて記録し、実体・情報と被災地復興支援、災害

渡邊准教授は、複数のデータソースとGoogleマップやGoogleアースなどのクラウドサービスを組み合わせたマッシュアップサービス群を開発、運用していることを説明、

オープンニングパネルディスカッション「東日本大震災における情報通信技術の役割」では、仲隆介京都工芸繊維大学教授をコーディネイターに、東北大の源栄正人教授、越村俊一准教授、佐藤翔輔助教、柴山明寛助教、首都大学

融合で付加価値を高める必要がある」とした。「リモートセンシングによ

日本大震災に関するテキストデータを収集、蓄積、解析し、発信するコーパス(Corpus)システム「TRENDREADIR」の運用内容を紹介。キーワードから被災

害の防災対策の解決、東海・東南海・南海地震の防災対策に役立てようというもの。9月から一部コンテンツのウェブ公開も始まっている。

把握できる地図コンテンツを短期間のうちに制作、提供することができた」とした。

